日本の新宗教の組織的展開 ②

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

日系人社会の天理教

現在、ブラジル伝道庁管内には 90 カ所の教会があり、その多くが日系人の人口比率が高い南東部（サンパウロ州・パラナ州）に集中している。それらの地域にはかつてコーヒーや綿花のプランテーションが広がり、そこで就労するための日本人の移住地があった。天理教はそのようにして生まれた日系人社会を基盤に広がったため、信者のエスニック構成における日系人の割合が非常に高い。

天理教ブラジル伝道庁は 2011 年に創立 60 周年記念祭を挙行した。現在、有力な教会を担当する教会長には、戦前の移民としてブラジルに渡り、伝道庁創設期に初代伝道庁長から薫陶を受けて布教に汗を流した人々の孫の代の者が多くいる。また、「天理移民」と呼ばれる 1960 年代に家族や単身で、あるいは呼び寄せ花嫁として移住した人々の子供らも教会長職を継承する年代になっており、伝道庁創設時に活躍した人々の孫の代の教会長らと共にブラジル伝道の中核になっている。ここでは彼らを「子弟世代」と呼ぶことにする。

現在、彼らは日系人社会という特徴が色濃い天理教をブラジル社会に切り開く懸け橋となって、ブラジル天理教団を活性化し始めているように見える。それは、天理教の「ブラジル化」に新たな方向を示すものといえる。ここで言う「ブラジル化」とは、非日系人化を意味する。

天理教でブラジル伝道は勢いがあると見做されている。そして、日系宗教のブラジル伝道の歴史で天理教は老舗教団の一つに位置付けられる。しかし、ブラジル社会で比較的知名度の高い生長の家（240 万人、1994 年）やパーフェクトリバティー教団（60 万人、1998 年）、さらにブラジル地理統計院の宗教人口データに日系宗教として唯一登場する世界救世教（約 10 万人、2010 年）と比べると、信者数が約 3 万人とされる天理教は規模において活発とは言い難い。

ブラジル伝道の現況

ブラジルの天理教は宗教社会学者の井上順孝がいう「移民依存タイプ」に相当する。例外的に北部および北東部に 4 カ所の教会があるものの、それらもやはり日本人移住者を足掛かりにして設立されものである。

ブラジル伝道の現況を理解するために伝道庁で年 3 回開催されている 5 日間の教義講習会（2011 年までは年 4 回）参加者の推移をみてみよう。教義講習会はブラジル独自のものである。同講習会は 1949 年に 29 名でスタートして参加者が年々増加し、1985 年まで増加傾向にあった（1979 年は例外的に 531 名を記録）。1986 年から 2008 年は 200 ～ 400 人を推移し、現在では減少傾向が認められる。しかし、伝道庁で毎月行われる月次祭の参拝者数は、過去 30 年間大きな行事を除いて通常 500 人前後で、ブラジルの信者総数においても目立った変化はないとみられる。そこで、教義講習会への参加人数の減少が、教勢の衰退というよりも参加者の関心の変化に関わっていると仮定してみよう。

この仮定を検証するうえで、2009 年から開かれるようになった学生生徒講習会は象徴的である。これは 15 歳から 20 歳までの若年層が対象で、教義講習会に代わるものである。この講習会が始まったことで講習会全体の参加人数が増加し始めた。そして、近年では伝道庁行事に参加する若年層が目立つようになってきている。

増加傾向が続いた 1985 年までとそれ以降の停滞、そして 2009 年からの増加という推移が観察されるが、これら二つの年は教勢のターニングポイントとして理解できそうである。それらは、実は子弟世代のライフステージの変化の時期にほぼ相当しているのである。

一つ目のターニングポイントは、子弟世代の中からブラジルの高校を卒業後、「ぢば」の教育機関へ留学する者が増えた時期にあたる。1983 年まで天理教校専修科（就学 2 年間。布教師養成のための教育施設）と天理大学専科日本語科（就学 2 年間）にブラジルから入学した者は多い年でも 5 人を超えなかった。

しかし、1984 年からの 10 年間は、毎年 10 人前後の留学生が派遣され、総勢 126 人を数えた。飛行便の増加によって「おぢばがえり」が身近になったとはいえ、ブラジルから最初の留学生が送られた 1952 年から 1983 年までの総数が 60 人だったことを考えると、1984 年以降の増加は子弟世代の集中を物語る。

二つ目の時期は、「ぢば」で仕込まれた子弟世代（40 代～ 50 代半ば）が教会長や布教所長となって数年が経ち、ブラジル伝道庁の重要な立場（青年会委員長、少年会委員長など）で諸行事推進の中核を担うようになった時期にあたる。

一つ目のターニングポイントについて、1984 年からおぢばに留学した移民子弟の一人で現教会長の A さん（47 歳）は、「ちょうどその頃、我々若い世代は、講習会や修養会の日本的なやり方についていけないように感じ始めていた」と語る。彼がいう「日本的なやり方」とは、講師が参加者に一方向的な授業スタイルをとっているというもので、語り合いによる理解を求める話し好きのブラジル人はそのようなやり方に興味を示さなくなっていたという。彼らは、「ブラジルジン」として「ニホンジン」である両親や祖父母世代の人々と対峙するようになり、アイデンティティ・コンフリクトを感じるようになっていた。

彼らの父親・母親世代はブラジル生まれでも、一世に引けを取らない日本語能力を持ち、日本的な素養や感性を身に付け（ることが期待され）た「ニホンジン」だった。彼らはブラジルの天理教の「日本的なやり方」に大きなコンフリクトを感じなかったとみられる。

アイデンティティ・コンフリクトの克服

思春期を迎えた子弟世代の信者らは、親の世代と違って日本語や日本文化そして天理教の受容に大きなコンフリクトを感じていた。1986 年以降の講習会・修養会への参加者の減少は、彼ら世代の若者たちが感じていた内的葛藤が表面化した結果だとみられる。

しかし、まさにその頃に、おぢばに留学する若者が増えたのも、親世代が若者たちを「おぢばで仕込んでもらいたい」と考えただけでなく、「ブラジル化」する子供らに日本語や日本文化を習得させることで「日系人」（「ニホンジン」）として育てたいという強い思いを持っていたからだと考えられる。

「ぢば」への留学は天理教の信仰の発露であるとはいえ、ブラジル天理教団の「日系人化」を継続させる契機でもあった。留学がきっかけとなって、日本人の配偶者を得たケースは少な

（13 頁へ続く）

（3頁からの続き）
人の方が生きいきとしている”などと嘆いている人がいますが、それは、切り出された用木は、まだ根のある山の木とは違うということ。用木は期待される役目を果たすために、手入れもされるし磨きもかけられる。しかし、それを嫌がり拒否していれば、やがては打ち捨てられ、根がないので朽ちてしまうことになるのです。

しかるに、一方、必ずしも全ての人がようぼくになるわけではありません。ですから、自分がようぼくになるについての承認と協力を、家族や身近な人たちから得ることが必要になるのですが、それを得ることが容易でないことも、また、「ひながた」に示されているところなのです。

（4頁からの続き）
［補］本連載32「その他の地域の海外伝道」でメキシコの天理教を書いたが、以下のように若干の補正を加えたい。

名古屋メヒコ教会を設立した安藤ペレス・せつ子は絵の勉強でメキシコに渡る前、名古屋大教会で森井敏晴会長（当時）から信仰の仕込みを受けた。森井会長から絵の勉強だけでなく、おたすけにメキシコへ渡るんだよと、海外伝道への熱い思いを聞かされた。それは森井会長が二代真柱から教えられたことでもあった。メキシコでの安藤は美術学習とともに布教活動に勇躍し、大勢の若者をようぼくに育てた。

（5頁からの続き）
けて死んだときに、そのながした血によって洗礼されて殉教者となる血の洗礼や火の洗礼などがある。天理教では殉教者という意識がそもそも不在であるから、それに対する儀式も不在である。しかし「みかぐらうた」の「いっせんにせんでたすけゆく」（九下り目の一）を「一洗二洗で救け行く」と漢字の訓読み表現をした場合（『おかぐらのうた』上田嘉成、天理教道友社、545頁、『みかぐらうた・おふでさき』村上重良校注、13頁）は、やまとことばではなく不自然で、くわえて天理教にも洗礼儀式があるのではないかと未信者には誤解されるおそれがないとは言えないであろう。筆者の「せん」論はやまとことばの多義性に触れて幕末の貨幣論から別項でおこなう。

（7頁からの続き）
くない。留学経験者と配偶者は、天理移民同様、ブラジルの天理教の「日系人化」を維持させる要因になったとみられる。また、同じ世代にはブラジルに移住して会長になっている日本人が7人おり、彼らも「日系人化」を強化しているともいえる。

しかし、その一方で、子弟世代は日本で「ブラジル人」アイデンティティを強く意識するようになっている。学生生徒講習会は子弟世代が企画しており、ブラジル人の感覚に合うように進められ、関心を高めている。このようにブラジルの天理教では「非日系人化」への模索が始まっている。

（10頁からの続き）
またもや行進中にストップ

7月27日午後7時、シチリアのパレルモで、カルメロ派の聖母マリア像の行進が、ポンティチェッロ通りの葬儀屋の前で、中年男の「止まれ」の一声でストップ。その葬儀屋というのはマフィアのボスの経営だ。そのボスは捕らえられていて、北のノバラの刑務所に1年半も収容されているのだが、彼、アレッサンドロ・ダンブロージョは今40歳だ。

同じような事件があってからまだ1カ月も経っていない。それは7月2日、イタリア半島の南のレッジョ・カラブリア州のオピード・マメルティーナで、自宅監禁の罪に問われている「ンドランゲータ」のボスの家の前で「恩寵の聖母マリア像」が、行進中にストップして、「お辞儀」をしたというものだ。その後、その時のマリア像の担ぎ手の25人が調査によって、7月9日に明らかにされた。その25人の中の一人は、「我々は『ドランゲータ』の二つの異なったグループに属し、神輿の前後に分かれている。しかし対立関係にあるのではなく皆友達だ」と語っている。

1800年代より「信仰会」と言う名目の小集団がシチリアではたくさん結成されていて、その実態はなかなか把握されないでいた。例えば、このアレッサンドロ・ダンブロージョはカルメロ山の聖母マリア信仰会の信仰深き尊厳者と見られていた。地元の検事フランチェスコ・メッシオネは「この出来事は、この地区の日常生活に暗い影を落とした不幸な出来事である」と言及した。残念ながらマフィアのサブカルチャーは未だ生き残っているのだ。警察や陸軍警察の告発、逮捕そして内部告発にもかかわらず、事件のあったパレルモのバラロー界隈では、40代のダンブロージョは、若者の間では神話的人物である。それは甥のフェイスブックへの次のような投稿でも読み取れる。「彼は我々全員の誇りである。」「彼は唯一者であり、特別者である。」この一連の出来事に、地区の神父ヴィンチェンツォは「不意の停止だった」「今年もまた起きてしまった」と呟いていた。枢機卿パオロ・ロメオはその行進のために代表団を送っていたし、ヴィンチェンツォ神父は「信仰会」のリストを要求されていた。事件のあった当日は枢機卿より特使も送られていたのだ。マフィアたちはこの「信仰会」を隠れ蓑にするのか、聖母マリア像の行進に非常に熱心だし、毎年復活祭前の聖金曜日の重大な聖行進を企画するのだ。これらの出来事はヴァチカンを苛立たせている。ヴァチカンの仲介は厳しさを増し、マフィアの介入を防ぐために「信仰会」の解散を求めている。

比較思想学会でパネル発表

金子　昭

比較思想学会第41回大会が7月20日、島根県松江市の中村元記念館で開催された。8本の個人研究発表、パネルディスカッション及びシンポジウムが行われた。私はパネルディスカッション「思想としての生命 第1回『出生と生命』」の部にパネリストとして発題した。パネリストとそのテーマは次の通り（発題順）。田中かの子・駒澤大学講師「いのちの『ありのまま』を引き受ける、という原則からの一考察」、安藤泰至・鳥取大学准教授「この世に生まれてくること―生命操作の時代のなかで―」、金子昭「人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み―」。コーディネータは冲永宜司・帝京大学教授がつとめた。